

1 取組の視点

1年生という入門期に、「学校」という集団で学ぶ場の最大のメリットである人とのかかわりあいもてる子どもの育成を目指す。

「かかわり」や学びの根本の力は、相手意識をもって話したり、相手の話を聞き取って考えを深めようとしたりする「話す・聞く」力である。その力をしっかりと身に付け、その上で、子どもたち一人一人が自分の考えをもち、それを追求していくための活動を目指した。

2 実践の概要

①単元名 こえにだしてよもう「くじらぐも」(小学1年生)

②単元の目標

- ・ 登場人物の様子などを想像したり、声に出して読んだりして、物語を楽しむ。
- ・ 「くじらぐも」に話したいことや学習の感想を「くじらぐも」への手紙として書く。

③単元の構想

○豊かに考える力(想像力)を広げるために、学習前に他のファンタジー作品の読み聞かせを行う。

○想像力を助けるために、くじらぐもの絵を用意する。

- ・ 作中人物に同化し、くじらぐもの上での会話を考えさせていく。
- ・ 図工の時間に「くじらぐも」を題材としたお話の絵を描かせ、より想像豊かにお話の世界を楽しませる。

○学習活動を工夫する。

- ・ 「くじらぐも発表会をして、音読や雲の上で自分たちもくじらぐもに乗った様子を劇にしておうちの人にみてもらおう」という学習の目当てを最初に示し、学習の到達目標を子どもたちと確認する。
- ・ 多様な音読方法を取り入れ、文章を正確に読む力をつける。
- ・ ふきだしに考えを書く時間を確保し、しっかりと意見をもった上で発表させる。
- ・ 二人組での「対話」や、グループでの「話し合い」、全体への「発表」など、自分の考えを表現したり、他の人の考えを聞いたりする場をもつ。
- ・ 動作化を取り入れ、意欲を喚起すると共に、体験を通して考えを深めさせる。

○課題提示を工夫する。

- ・ 二者択一の間いを取り入れ、自分の考えを明らかにさせて学習を進める。
- ・ 具体物や絵など視覚に訴えるものを用い、見て分かる提示を行う。
- ・ 発問は、短い言葉で分かりやすく示す。(教師の言葉の精選)
- ・ 自分の考えの根拠となる文を見つけさせ、線を引かせる。

○話し方・聞き方の学習ルールを徹底する。

- ・ 「つま先・おへそ・目ん玉」を向けて話を聞く姿勢の徹底指導を行う。
- ・ 聞いたことに対し、一言感想を言ったり、書いたりする場をもつ。
- ・ ハンドサインと提示した基本話型をもとに、友達の意見を聞き取り発言させる。

④指導計画 (全10時間)

次	時	主な学習活動	留意点
0		・ファンタジー作品の読み聞かせ	・非現実世界のおもしろさを十分に味わわせる。
1	1	・新出漢字の練習をする。 ○「くじらぐも」を読み、感想をもつ。 ・今までに見た雲について発表しあう。 ・「くじらぐも」の範読を聞き、あらすじをとらえる。 一番おもしろいと思ったのはどんなこと?	・「くじらぐも」の題名と作者を押さえる。 ・想像力を広げられるよう、くじらぐもの絵を用意しておく。

2	2	○第1の場面を読み、くじらぐもと子どもたちの呼応の様子を読み取る。 ・動作を加えながら、音読する。 空にあらわれたくじらは、どんなくじらだろう？ 聞くじらがしたのは、しんこきゅうである。○か×か。	・しんこきゅうだけでなく、「くものくじらも、空をまわりました。」「くじらもとまりました。」の文を根拠に、ほかのこともまねしていることに気付かせる。 ・子どもたちとくじらの様子を対比する。
	3	○第2の場面を読み、くじらぐもとの出会いを読み取る。 くじらぐもと子どもたちのようすは？ ㊦ くじらが「ここへおいでよう。」といったのは、「子どもたちのまねをしたから」か、「いっしょにあそびたいから」か。	・「よびました。」に対して「こたえました。」とあり、単にまねをしているのではないことに気付かせる。
	4	○第3の場面を読み、くじらぐもに飛び乗ろうとする様子を読み取る。 みんなは、どうしてくじらぐもにのることができたのだろう？ ㊦ みんながくじらぐもにのることができたのは、「かぜにふきとばされたから」○か×か。 ・読み取ったことをもとに動作を加えながら、音読する。	・文章を根拠に、理由を考えさせる。「みんながのれた」ことのわけを、考えさせるようにする。 ・言葉が実感できるように、動作化させてみる。
	5	○第4の場面を読み、空を旅する子どもたちの様子を想像する。 くじらぐもに乗ったら、自分ならどんなことをしたい？ ㊦ 自分やお友達がしていることや話していることをワークシートに書きましょう。	・なぜそれをしたいのかを書き、くじらぐもがやってくれそうか、文章を根拠に考えさせる。
	6	○第5の場面を読み、くじらぐもと別れるときの様子を読み取る。 せんせいがおどろいたのは、なぜだろう？ 子どもたちは「さようなら。」のあとに、どんなことを言っただろうか？ ・ワークシートに書く。	・「お昼になったこと」という答えに終わらせず、先生の気持ちを考えさせる。 ・自分だったら何を言いたいのか、物語の子どもたちはなんと言ったかを自由に想像させ、発表させる。
3	7	○「くじらぐも発表会」をする。 ・グループで、役割を決めて音読の練習をする。 ・空の旅の様子を、グループごとにシナリオを作って劇化する。	・発表グループは3つ（9～10人）にする。 ・動作を入れる、会話の読み方を工夫するなど、グループで相談しながら練習させる。 ・参観日に発表会を行い、おうちの人に見てもらおう。
	8	・「くじらぐも」発表会をする。	
	9	・感想を発表する。	
4	10	○くじらぐもに手紙を書く。 ・今までの学習をふり返って、くじらぐもに話したいことを考えて、手紙を書く。	

⑤授業の様子(2次第4時間目を中心に)

・前時までの学習をふり返った後、3の場面を読み、くじらぐもに飛び乗ろうとする様子を読み取った。どうして、みんながくじらぐもに乗れたのかを自由に発言させた後、「みんながくじらぐもにのれたのは、『かぜのおかげ』(だけ)である。○か×か」という問題を提示した。



・書き込みプリントを配布し、わけとなる文を見つけて線を引かせる活動を行った。どの子も根拠文を見つけて線を引くことができた。

・その後、二人組での対話を行い、どの子にも自分の考えを人に聞いてもらうという学習経験と読みの交流をさせた。

・『『かぜが、みんなを空へふきとばしました。』ってかいてあるから、○です。』に賛成は6割。それに対し、「みんなががんばったから」(A児)、「みんなががんばったの





と、くじらがおうえんしてくれたのと、かぜのおかげ」(M児)という意見が相次いで出された。それを聞いて、「やっぱり、(意見を)変える。」という子が続き、最終的に「○」は1割になった。「くじらの応援」や「みんなで練習したから」という意見を認めながらも、「やっぱり『かぜがふいたから』だよ。」という考えだった。

・最後に、読み取ったことを動作化して、音読した。子どもたちは、「手をつなぐんだよ。」「みんなでまるくならなきゃ。」と、自分たちで、書いてあることを実際の動きに表し、大張り切りで取り組んでいた。

・単元の最後に、おうちの人から「くじらぐも発表会」を見てもらった。役割読みでの劇化、一人一文の暗唱、雲の上に乗ったときの一人一人の自由発想の台詞発表などを行った。



くじらぐも発表会、とてもよかったです。一人一人がセリフをちゃんと覚えていて、みんながしっかり言っていたことが、すごいと思いました。最後に、子どもらしい感想が聞けて、大変によかったです。くじらぐもに乗って、いろいろな所に旅ができた方がいいですね。ありがとうございました。

(参観者からの感想の一部)

3 考察

- ・**二者択一の問い**は、子どもたちのモチベーションを高め、文章にしっかりと目を向けさせることができ、手法としてよかった。○にした子も×にした子も、複数のわけを考えること・根拠文を見つけるといふねらいに達することができた。(授業後の協議会では、「かぜのおかげ」を×と考えるのには、納得できない子もいたことから、○×で問う内容ではなかったのではないかと、との指摘をいただいた。問いの内容・言葉をさらに吟味する必要がある。)
- ・**場面ごとのワークシート**を用い、線を引かせたり、ふきだしに書かせたりする活動は、一人一人の考えをもたせるのに有効であった。
- ・**ハンドサイン**を用いての発表は、聞く力と態度を身に付けるのに効果的である。1年生でも、ハンドサインを用い、話型を使って話していた。学年が上がっても継続させていきたい。
- ・**ペアでの対話**は、どの子にも自分の考えを人に話すこと・人から聞いてもらうという学習経験ができる。一人一人を鍛えるのに、有効な学習形態であった。今後も大いに取り入れていきたい。
- ・一斉読み、班での「。」読み、役割読み、場面読みなどの**多様な音読方法**を取り入れたことで、読むことへの意欲が高まり、読みが深まった。
- ・発言の声が小さい子が多いため、声のトーンを高くしたり、自信をもって話せるように経験を積みませたりして、訓練していきたい。
- ・**動作化**は、理解と表現を一体化することができ、楽しい授業となるので、大いに取り入れていきたい。
- ・**「くじらぐも発表会」**を行ったことで、目的意識が明確となり、学習意欲の高まりにつながった。